



# 静脩

2006年3月

The Kyoto University Library Network Bulletin

Vol. 42. No. 2

## 電子ジャーナルの現状と安定利用のために

京都大学図書館機構長・京都大学附属図書館長 大西 有三

京都大学において電子ジャーナルの利用が年々増加しています。2005年度には全学で利用できる電子ジャーナルは9,560タイトルに及び、更に増加傾向にあります。これら全学提供のタイトルの一覧は、

<http://ddb.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp/gakunaiej.html> で検索することができます。

京都大学では長い間、多数の冊子体の雑誌が購読されてきました。しかし、インターネットの普及と雑誌の電子化に伴い、冊子体に加えて電子ジャーナルの導入が進みました。その検討は1999年度附属図書館商議会において始まり、2002～2003年度の(同)外国雑誌等に関する専門委員会において、電子ジャーナルの選定と、それらの全学的提供の決定がなされ、現図書館協議会に受け継がれ現在に至っています。

電子ジャーナルの利用が増加する中で図1に見られるように、冊子体の購読が減少する中で、大学全体の雑誌負担額はほぼ横ばいを続け、差額を埋める電子ジャーナルの経費負担が年々増加しており、その対応に苦慮する事態になっております。これは、一大学の問題ではなくわが国の大学全体の問題であるとして、国立大学図書館協会でコンソーシアムを形成して館長を交

えたメンバーが出版社と交渉を重ねています。

図2は電子ジャーナル Science Direct の年間利用実績を示したもので、毎年増加していることは一目瞭然です。他の出版社の電子ジャーナルについても同様の状況です。こうした利用増加により1件あたりのコストは大幅に低下し、投資効果は上がっております。また、冊子を購読していない電子ジャーナルの利用度も高いことがわかっております。



このように、電子ジャーナルが有効に使われている反面、不正利用の増加という危険な状況があります。図2のグラフの中での利用数突出は、不正ダウンロードが頻繁に行われた状況を示しておりますし、たびたび不正利用が見られ、出版社からアクセス拒否の処置を通告されることから、多くの利用者に不便をお掛けしております。学内的に不正利用の防止アナウンスを行っておりますが、根本的な解決策になっており

ません。こうした事態に対処するため、図書館協議会の承認を得て、電子ジャーナル利用のための認証システムの構築を進めております。本格稼働までに多少の不便をおかけ致しますが、安全な利用のための方策としてご協力のほどよろしくお願いいたします。

最後に、電子ジャーナルを安定的に利用していくためには、恒常的な予算措置と安心できるセキュリティシステムが不可欠です。利用者の皆様方のご支援とご理解をよろしくお願いいたします。

(おおにし ゆうぞう)

図1 冊子体・電子ジャーナル購読経過 (1999 ~ 2006)

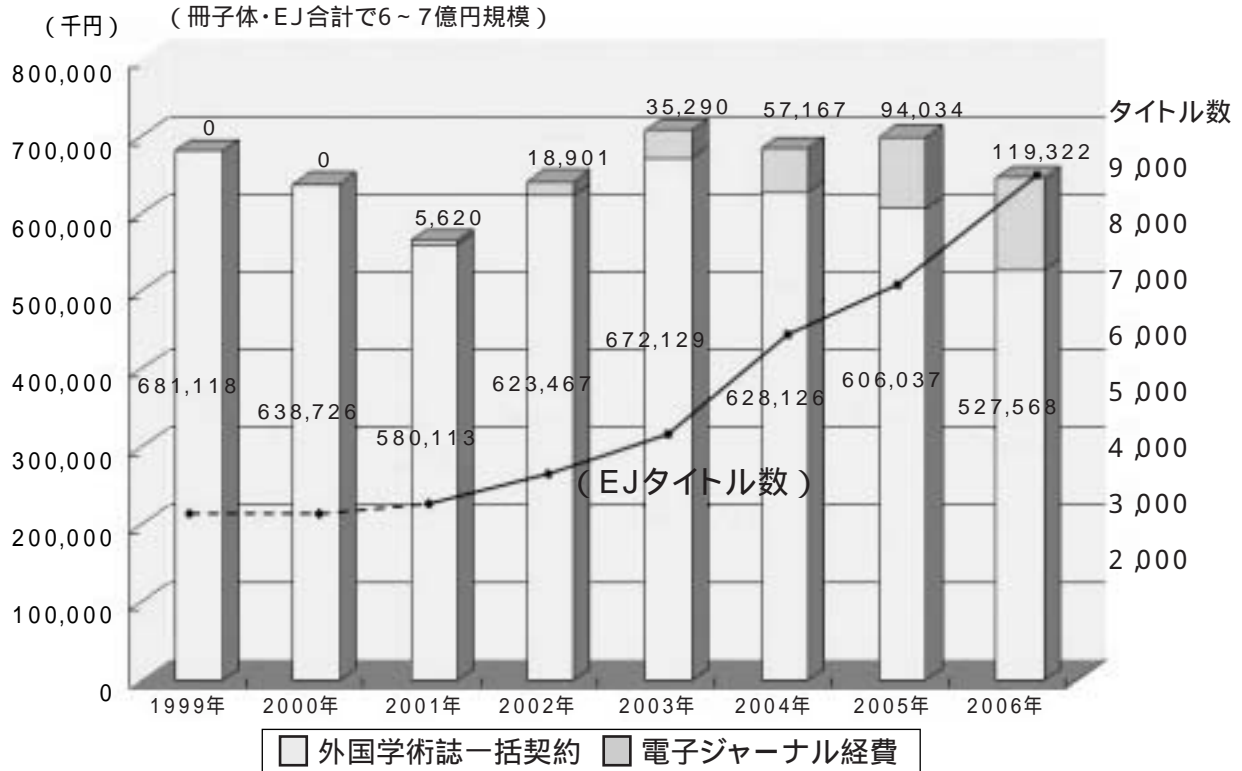
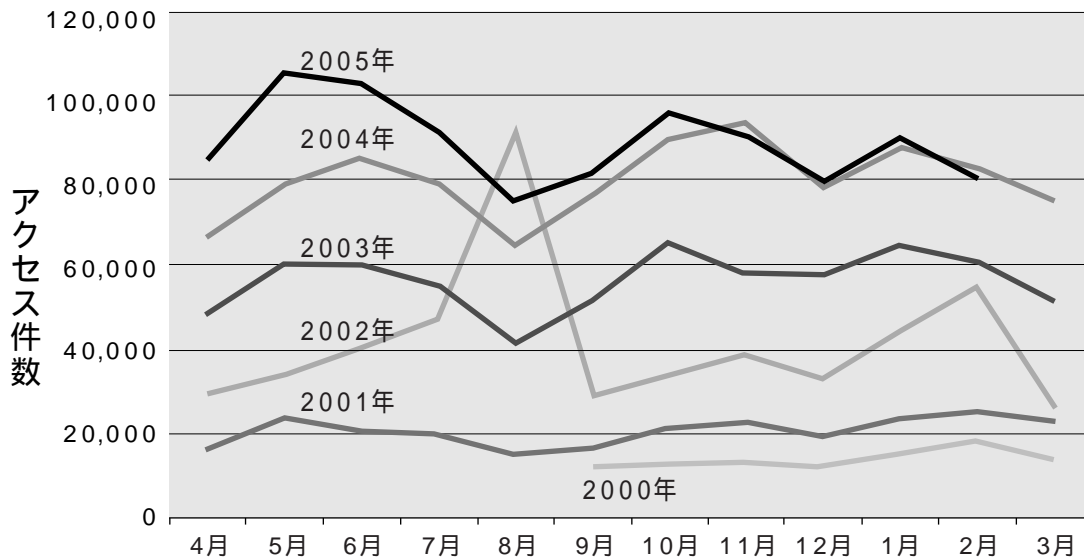


図2 Elsevier サイエンスダイレクト全文利用



# 電子ジャーナル整備の経過

## - 契約のしくみと経費負担 -

### 1. はじめに

インターネットの普及と軌を一にし、2000年代から爆発的に増えてきた電子ジャーナルはそのすぐれた機能性と利便性のために知的情報資源として教育・研究に欠かせないものとなっています。この増え続ける電子ジャーナルの大海の中で、京都大学として、いかにして電子ジャーナルを選択し、経費基盤を確立して、全学的に安定した利用を保障していくかが、図書館機構の大きな課題となっております。

### 2. 電子ジャーナル導入経緯と整備の現状

京都大学では、電子ジャーナルの急激な増加と利用者のニーズに併せ、以下のように全学的に計画的な導入を進めて参りました。

1999年：附属図書館商議会「電子図書館専門委員会」及び「選書分担商議員会議」で外国雑誌重複購入を見直し、電子ジャーナルの共同利用促進の必要性を確認。

Elsevier社の「SD-21」を試行導入。

2000年：国立大学図書館協議会電子ジャーナル・タスクフォースが発足し、共同交渉開始。

附属図書館商議会「外国雑誌問題検討専門委員会」を設置し、外国雑誌の重複調整及び電子ジャーナル導入拡大の具体化を図る。

2002年：附属図書館商議会「外国雑誌等に関する専門委員会」で電子ジャーナル及びデータベースの充実方策を検討。

2004年～：京都大学図書館協議会第一特別委員会（情報資源整備）が本学における学術情報整備基盤を総合的に整備するための方策を検討し、全学規模の電子ジャーナルとデータベースの整備はその重要課題であるこ

とを確認。

現在、京都大学全体で利用できる電子ジャーナルは10,000タイトルに達しようとしておりまだまだ増え続けております。この電子ジャーナルは契約主体、契約方法により大きく次のように分類できます。

#### 1) 全学契約分（図書館協議会了承）

図書館協議会で、学術研究に不可欠な情報資源として、全学的に整備し経費の確保にあたること了承されたもので、出版社単位にパッケージ契約されているものが主体となっております（表1参照）

2005年：約5,500タイトル（9,400万円）

2006年：約8,700タイトル（12,000万円）

#### 2) 部局契約分

部局が契約・経費負担し、全学利用に供しているものです。（2005年度で約1,500タイトル、2006年で約1,000タイトル）（なお、これ以外にも、部局契約で利用範囲が部局に限定されているものも多数あります。）

ただし、1)と2)の区分は固定的なものではなく、今後の研究動向や、利用動向を見極めながら常に見直していく必要があります。

### 3. 契約のしくみ

全学契約の電子ジャーナルのほとんどは、出版社ごとにとまとめたパッケージとして提供されています。京都大学で契約しているモデルでは、いずれも機関購読（固定）代金によること（利用の都度課金される「従量制」ではないこと）及び従来の冊子体を維持することが、電子ジャーナルを継続的に購読することとセットになっています。つまり、電子ジャーナル関連冊子体を解約すると、それと連動して電子ジャーナル経費が上積みされ、

表1 全学導入電子ジャーナル一覧(2006年)

	資 料 名	タイトル数	分 野
1	Blackwell Synergy コレクションモデル	750	(全分野)
2	Elsevier Science Direct フリーダムコレクション	1,850	(全分野)
3	Springer Link (Kluwer Academic Publishers)	1,200	(全分野) アーカイブ含む
4	Wiley InterScience	650	(全分野)
5	ACS (American Chemical Society)	30	(理工学系)
6	AIP (American Institute of Physics)	20	(理工学系)
7	APS (American Physical Society) APS-ALLパッケージ	7	(理工学系)
8	IEEE ASPP	110	(工学系)
9	Nature + Nature姉妹誌	36	(自然科学一般)
10	Proceedings of the National Academy of Sciences of USA	1	(自然科学一般)
11	Science	1	(自然科学一般)
12	Scientific American	1	(自然科学一般)
13	EBSCOhost Academic Search Elite	2,050	(全分野)
14	ACM (Association for Computing Machinery) Digital Library	328	(工学系)
15	Cell Press	7	(バイオ系)
16	IEEE/CS e-Proceedings	1,230	(工学系)
17	JSTOR. Arts & Sciences I Collection	200	(人文・自然科学系)
18	JSTOR. Business Collection	70	(社会科学系)
19	Oxford University Press	165	(全分野) アーカイブ含む
	合 計	8,706	

電子ジャーナル経費と関連冊子体経費の和がほぼ一定になるような関係になっています。

この関係を図1(前掲記事 p.2)で表します。1999年から2006年に亘って、冊子体、電子ジャーナルの総額が6億円～7億円規模で推移しているのが読み取れます。

この出版社単位での契約にあたり、国内の大学が共同で出版交渉を進め、少しでも有利な条件で契約を結ぶために各種コンソーシアムが形成され、京都大学も国立大学図書館コンソーシアムの交渉結果をもとに、さらに個別に各出版社と交渉してさらに有利な契約金額を決める方式をとっております。上記で示した2006年度電子ジャーナ

ル予定額約1億2千万円も出版社との度重なる値引き交渉の結果です。

京都大学の電子ジャーナル契約の経過を以下に詳述します。

#### 1) コンソーシアムによる協議

国立大学における出版交渉は、国立大学図書館協会学術情報委員会電子ジャーナル・タスクフォース(以下「タスクフォース」という。)を中心に進められています。平成12年に国立7大学(北大、東北大、東大、名大、京大、阪大、九大)附属図書館長が連名でエルゼビア社へ、当時問題になっていた外国雑誌の高騰に関連して再考を促す要望書(円価格問題、並行輸入問題)を送付した

のが設置の発端です。

タスクフォースでは、電子化の推進による学術情報環境の適正かつ継続可能な改善・推進を目指し、出版社との直接交渉に当たっています。メンバーは出版社との頻繁かつ迅速な交渉に対応可能な関東圏の大学の館長と図書系職員が中心です。

交渉がまとまった場合は、出版社から国立大学コンソーシアム向けの合意内容が示されます。タスクフォースによる交渉やその成果を次に列挙します。

- a. 各大学が導入可能かつ適正な価格による出来るだけ多数のタイトルを含む購読モデルの導入
- b. 値上率の上限設定( 冊子の値上げは毎年7～15%程度に対して、電子ジャーナルパッケージは上限5%とするよう交渉。電子ジャーナルが冊子に連動して値上がりするのを阻止)
- c. サービスに関わる条件設定( 図書館間文献複写、walk in user 対応、リモートアクセス)
- d. 標準的統計( COUNTER )資料の提供
- e. アーカイブの買い切り交渉、日本国内における保存と提供の仕組み構築

## 2) 大手出版社の契約モデル

次に、大手出版社の国立大学図書館コンソーシアム向け提案モデルとして2つの代表的な契約モデルをご説明します。

《冊子 + 電子ジャーナル》モデル・・・従来型モデル

《電子オンリー》モデル・・・新モデル

電子ジャーナルが提供され始めた当初は冊子購読が主体であったため、出版社側も冊子と対応した条件の提案が主流でした。それが の《冊子 + 電子ジャーナル》モデルです。しかし、電子ジャーナルの普及に伴い、 の《電子オンリー》モデルが提案されてきました。

このモデルともに共通点があり、それを以下に列挙します。

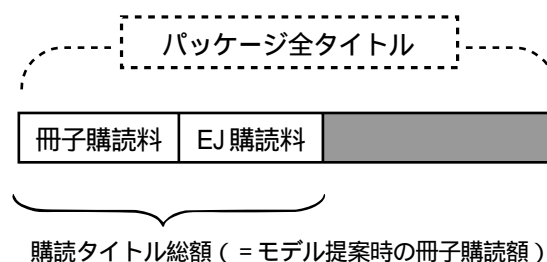
- ・パッケージ対象誌は出版社により異なるが、フルコレクション、分野別、クロスアクセス等の

選択肢がある。

- ・パッケージの場合、対象誌数は多い。
- ・購読料金は、コンソーシアム提案時の冊子購読タイトル(重複購入を含む)総額が基準。
- ・次年以降は、提案時の購読タイトルを冊子、電子ジャーナルに関わらず維持する必要がある( = 購読規模維持)
- ・購読料金は値上がりする(コンソーシアムの値上率上限5%以内)

《冊子 + 電子ジャーナル》モデル

冊子と電子ジャーナルの総額を維持すると、パッケージ対象誌をすべて閲覧できます。ただし、次年度に冊子の購読を中止した場合は、その支払相当額の電子ジャーナルを新たに購読契約する必要があります。



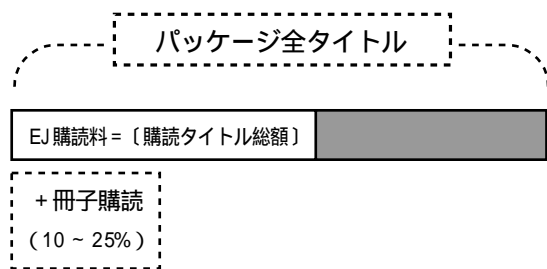
このモデルは、購読規模維持が前提条件であること、冊子購読中止が電子ジャーナル購読額に影響することから、けっして積極的に評価できる訳ではありません。しかし、冊子価格と連動しているため、電子ジャーナル初期導入時の費用負担が低額になることが利点です。

《電子オンリー》モデル

冊子購読をすべて電子ジャーナルに切り替えるモデルです。

冊子を追加購読したい場合は概ね各出版社とものに割引価格(カタログ価格の10～25%)で提供されます。

《電子オンリー》モデルでは、電子ジャーナル価格と冊子が連動しない点が利点です。冊子を購読中止しても電子ジャーナル料金が增加することはありません。



ただし、上図のとおり最初から購読タイトル総額をすべて電子ジャーナル購読料として支払う点には注意が必要です。

例えば、京都大学ではエルゼビア社の電子ジャーナル購読料（2006年分）は約4千万円で、購読タイトル総額（冊子+電子ジャーナル総額）は約2億円です。つまり、《電子オンリー》モデルとしては、約2億円必要です。各出版社とも各種割引があります（エルゼビア社の場合、100%電子ジャーナルオンリーに変更すると購読料金13%値引き）。しかし、総額が要求されている点に変わりないことには注意が必要です。さらに、割引価格とはいえ、冊子を多数購入すると大学全体の購読料金を見た場合、かえって割高になります。

冊子と電子ジャーナルで財源が異なる場合、モデルを切り替える際には、高額な電子ジャーナル購読料をどの財源で確保するのか、機関内で十分検討しておく必要があります。

なお、「Nature」（「Nature」本誌、姉妹誌、EMBO Journal）は大学の構成員規模（FTE）による価格設定を行っています。このモデルよりは判り易いですが、冊子との連動がない分、冊子を多数購読すると割高になります。京都大学の場合、「Nature」本誌は2006年で25部重複して購読しており、電子ジャーナル購読料と合わせるとかなりの額になります。電子ジャーナルを導入しているのにこれだけの数の冊子が必要が再考する必要もあるでしょう。

### 3) 京大での出版社交渉

タスクフォースでは、国立大学にとって標準的に妥当な線を確定するための交渉をしています。各大学で固有の事情がある場合はその後の個別交

渉となります。

京都大学の場合、コンソーシアム提案をそのまま受け入れるのは難しい点が多々あるため、主要な出版社とは個別交渉を行っています。

一例を挙げると、モデル提案時の冊子購読タイトルで購読料を決められると、冊子重複購入が多数あったため、大変高い価格に設定されています。そのため、重複分を減額するよう交渉しています。

### 4) 京大モデル

京都大学では今のところ2)の《冊子+オンライン》モデルに沿って電子ジャーナルを導入しています。

各社の契約では、例えば、エルゼビア社ではフリーダムコレクション（エルゼビア社のほぼ全部の電子ジャーナルを網羅）を導入しています。エルゼビア社の提案には、分野別コレクションや、パッケージではなく、タイトル毎の購読等様々な形態がありますが、今のところ、フリーダムコレクションが一番タイトル毎の単価が安く、しかも大量の電子ジャーナルが導入できるため、図書館協議会では本学にとって教育研究上のメリットが大きいと判断しています。

《冊子+オンライン》モデルでは、冊子を中止した際に増加する電子ジャーナル購読料を誰が支払うか？という問題が常に起ります。この冊子との連動を解きほぐし、電子ジャーナルを安定的に維持するためには、電子ジャーナル価格が一定している電子オンリーモデルの導入検討も必要でしょう。ただし、これは前項でご説明したとおり、電子ジャーナル料金が一挙に高額になるので、十分な財源の確保が必要です。また、冊子の保存問題も視野に含めて検討することが大切です。

## 4. 経費負担方式

### 1) 経費負担方式の変遷

まず、経費負担方式の変遷を以下に示します。

2001～2004年 外国雑誌共同購入による「節約額からの分担徴収」\*

\*（その他、2002年からは文部科学省による

電子ジャーナル導入経費措置が加わり、また2003年からはさらに部局ごとの基盤校費比率による拠出金の徴収を加えることとなった。)

2005年「節約額からの分担金徴収」方式の見直し

- ・全学的経費の確保
- ・附属図書館経費
- ・部局拠出(外国雑誌共同購入関係部局負担相当分+教育研究基盤校費比率)

(2005年は新たな負担方式を確立するまでの間の「経過措置」とした。)

## 2) 平成18年度(2006年購読分)への対応

図書館協議会での検討により平成18年度(2006年購読分)は、教育研究基盤校費比率による暫定的な分担方式が提案されていますが、その他、利用度等を反映する負担方式を早急に検討する必要があります。

また、平成18年度中に、大量ダウンロードなど不適切な利用への対策として利用資格の認証システムも導入されます。

利用の際には1日1回はIDを入力する必要があります。ご不便をおかけしますが、何卒ご協力くださいますようお願いいたします。

## 3) 将来的な経費負担のあり方

利用に応じて負担する方式も、行き過ぎた受益者負担の考え方は、教育・研究の意欲を阻害することになります。また、全額を全学的な経費で負担するというのも大学の合意が得られません。

では、将来的にはどのような分担方式がよいでしょうか。これには大学自体の予算減少や今後どういった財源を電子ジャーナル購読料金に割り当てるのが妥当か等様々な要因があり、今のところ結論は出ていません。図書館協議会では、様々な経過を見守りつつ引き続き議論を深めていく必要があります。

## 5. 今後の電子ジャーナル整備のあり方

今後の電子ジャーナルをどう整備していくかを最後に考えてみます。

予算の減少に伴い、電子ジャーナルの維持が困

難になってくることも予想されますが、図書館機構としては、電子ジャーナルは学術情報の基盤整備として研究に不可欠なものであり、今後とも積極的に導入する方向で検討を進めて行く予定です。

今後の整備には、3つの要素が関連してきます。一つは出版社との問題 - 提供するモデルの変化等、二つ目は電子ジャーナル導入タイトルの見直しと予算確保の問題、そして、最後に冊子と電子ジャーナルをどうバランスをとって維持していくかということです。

## 1) 出版社交渉の継続(契約方法の明確化)

電子ジャーナル購読料算出のわかりにくさは、もともと冊子のように定価が公表されていない点にあります。あいまいな「規模」による見積を廃し、わかりやすい納得できるモデルを提案するよう出版社に働きかけていますが、全世界共通の課題でもあり実現していません。

また、毎年の自動的な値上げはもともとの金額が大きいただけに大変影響があります。本学の場合、前述のようにエルゼビア社からは約2億円で購読しています。5%値上げされると1千万円必要です。出版社に印刷代が減ったのになぜ電子ジャーナル代が安くないのかと質問してみると、電子ジャーナル維持のための設備投資やホームページ開発、検索サービス機能充実のための研究に費用がかかるかと説明されたことがあります。しかし、研究者は複雑なサービスを欲しているのでしょうか? 安定的な運用は必要ですが、個々の出版社のサイトで様々な検索機能や充実したホームページが必要なのか、過剰で余分な部分ではないのか? と反論しています。

出版社によっては2006年から3年間電子ジャーナル購読料を値上げしないところもあります。他の出版社にも同様に値上げを抑制するよう要求しています。

## 2) 電子ジャーナル導入タイトルの見直し

2006年分の全学導入電子ジャーナルパッケージは19種です(表1参照)。国立大学コンソーシアム提案の電子ジャーナルパッケージで本学には

未導入のものもまだありますし、また、その他様々な出版社から新たに電子ジャーナルが提供されてきています。各部局や研究者から新規ジャーナルの導入について問い合わせもあります。

平成18年度からは、新規タイトルの選定、購読タイトルの見直しについて検討していく必要があります。

電子ジャーナルは研究教育に不可欠な情報基盤であるという認識を基本としつつ、年々変化する情勢に対応するため、より有用なジャーナルの導入を目指して、選定プロセスの確立を図っていく予定です。

### 3) 冊子の収集保存と電子ジャーナルとのバランス

電子ジャーナルの導入と関連して、冊子を今後どう維持するかを考えていかななくてはなりません。京都大学としてこれからも冊子が必要なのか、1冊は維持していく必要があるかという原則論。それに加え、どの冊子をどの予算で費用負担するのか、誰が購入決定をするのかという各論を検討する必要があります。分野による違いも考慮することになりましょう。

現在、図書館協議会第一特別委員会では、一部の冊子は「外国雑誌共同購入」を行い、冊子を1冊は維持するとともに重複調整により冊子購入部局の負担を減らすという方針を打ち出しています。しかし、原則的に選定及び費用負担は各部局に任

されており、全学的にコンセンサスを得られているわけではありません。

冊子の収集保存と電子ジャーナルの購読をいかにバランスよく行うかは非常に難しいことであり、なかなか意見集約が困難ではありましたが、京都大学として、現在そして未来の研究者に学術文献をどう橋渡ししていくか、十分に議論していくことが必要ではないでしょうか。

以上、電子ジャーナル契約のしくみと経費負担のあり方についてご説明して参りました。

個々の出版社の購読条件は、コンソーシアム上の制約もあり具体的なご説明ができず一般的なモデルで説明いたしました。そのため、わかりづらいところもあったかと思いますが、何卒ご容赦ください。

また、電子ジャーナルではオープンアクセス誌の発展や国内刊行雑誌の維持発展問題等様々な要因が今後とも関係してくるでしょう。

これからも図書館機構では、全学的視野に依拠して教育研究基盤の整備のため努力していきたいと思っております。平成18年度も図書館協議会第一特別委員会が主たる協議の場となります。

全学的に安定した合意が得られるようご協力をお願いいたします。

( 附属図書館情報管理課 )



# 今後の電子ジャーナル

京都大学ウイルス研究所 教授 松岡 雅雄

研究することを第一義としている研究者にとって論文を出すということは、その研究を評価してもらい発表するという研究の最終段階であり、正に正念場である。研究者にとって避けては通れない評価においても、論文は非常に大きなウェイトを占めており、論文が無ければ昇進もおぼつかない。このように研究者の生殺と奪の権を握っているかに見えるジャーナルであるが、近年のインターネット社会は研究のみならず論文の投稿・公開にも大きなインパクトを及ぼしており、今後数年間で更に大きな変化が予想される。従来の紙媒体の雑誌とは別にインターネットで公開する、いわゆる電子ジャーナルは増加しつつあり、その評価も変化しつつあるように感じている。

オープンアクセスジャーナルは投稿した場合に料金は取るものの誰でも制限なく閲覧が可能なものであり、最近増加傾向にある。私が関係している *Retrovirology* という電子ジャーナルは *BioMed Central* が取り扱っているオープンアクセスジャーナルの一つであり、エイズウイルスやヒト T 細胞白血病ウイルスなどレトロウイルスに関する論文を掲載している。レトロウイルスは共通点が多くエイズウイルスの感染爆発に伴い研究者人口も飛躍的に増加している。私自身も、昨年度このジャーナルに 2 編の論文を投稿し掲載されたが、その経験から気付いた点に触れておきたい。まず投稿であるがオンラインに特化した強みもあり非常にスムーズであった。また査読は投稿から約 1 ヶ月で終わり受理された後の掲載も極めて早く、このような即時性も大きな強みである。また自分の論文が何回ダウンロードされたかをリアルタイムで知る

ことができ、良く閲覧された論文は “ highly accessed ” のマークが付けられている。このような双方向性もオンラインに特化したジャーナルの大きな特徴である。

ジャーナルに関して切り離せないのはインパクトファクターである。これは、そのジャーナルの過去 2 年間の全ての論文が、その年の 1 年間に平均何回、雑誌で引用されたかを表している。つまりジャーナルの平均の被引用回数である。この値が大きい程、良く読まれ引用されていると言え、そのような論文を多く掲載している良質なジャーナルと判断されている。勿論、平均値であるから絶対的な判断基準ではなく警鐘を鳴らす意見が多いのも事実である。しかし、他に簡便な客観的基準が無いために汎用されており、そのため研究者は少しでもインパクトファクターの高いジャーナルに投稿しようとするし、ジャーナル側はインパクトファクターを上げる努力をする。情報が氾濫する現状では論文に review article を良く引用する傾向がある。従って多くのジャーナルでインパクトファクターを上昇させるため review を定期的に掲載するようになってきている。最近、査読の依頼があったジャーナルはインパクトファクターを 5 以上に保ちたいので前年度より論文数を半分に減らすという方針を明記してあり驚かされた。

今後、電子ジャーナルはどのような展開をみせるのであろうか？オープンアクセスジャーナルが増加していくのは間違いないであろう。いくつかの既存のジャーナルも最新号から無料の公開を始めているものがあり、既存ジャーナルもオープンアクセスジャーナルへと向かって行くのかもしれない。オープンアクセスは目に触

れやすく引用される頻度も増してくるためインパクトファクターは上昇する可能性がある。既存のジャーナルで購読料の急騰は大きな問題になっているが、図書館が財政的理由のためにジャーナルを購読できない程になると研究者もそのジャーナルにアクセスできないこ

とになり、オープンアクセスジャーナルへ軸足を移す動きが出てくるであろう。ジャーナルの成功は、どれだけ良い論文を掲載できるかにかかっており、結局、研究者自身が、どのような選択をするかを問われているとも言える。

(まつおか まさお)

## 雑誌電子化時代における情報確保と価格交渉

京都大学農学研究科 教授 谷 誠

### 交渉における立場

交渉における立場の重要さの例をまず挙げさせていただく。不動産販売には、建築条件付き土地というのがある。建築業者が土地を売る場合に、その業者で家を建てることを条件にする売り方で、売り建て住宅とも呼ばれる。この売り方は、建て売り住宅と異なり、建設資金を予め投入して建築した家を売れるまで汚れないように維持する必要がないという、業者にとって大きなメリットがある。また、購入者にとっても、家のある程度自由設計できる点はメリットである。問題は、土地購入契約を行うと、住宅建築に関して競争見積もりをとることができなくなるため、建築業者の立場が独占的で強いものになる点にある。そのため、トラブルを防ぐため、土地契約がなされた後でも、もし購入者希望の建築設計ができない場合には、業者は契約を解除して無利子で契約金を購入者に返済することになっている。極端に強者と弱者とに分かれてしまう交渉を回避するような配慮がなされているわけである。

### 「知」の独占化における危険性

われわれのコンピュータ社会は、すでに土

地を購入して家の建築に関して業者と向かい合っている弱い立場の購入者に似ている。コンピュータソフトウェアは、頼みもしないのに頻繁に改編され購入をあおられる。おせっかいな機能はやめてくれという、あわれな年配利用者の声はなかなか届かない。先の建築条件付き土地と異なり、独占が地球規模に及んでいるのにもかかわらず、有効なトラブル救済策がないように思われる。このような、すでに独占していることからもたらされる諸問題のほかに、その独占会社が倒産したり、その会社の存在している国と国交が断絶したりという異常事態が今世紀中に起こらないとはいえない。そうした場合に、社会の蒙る不利益は計り知れないものがある。化石燃料による世界経済の進展、それが先進国から途上国へ拡大して人口が増大し、循環資源であるはずの水や食料や木材などの持続的供給が逼迫している。いずれ、循環不能な化石燃料は絶対的な枯渇に向かうであろう。そこでは必ず資源奪い合いの国際紛争が発生するであろう。こうした危機において人間の「知」の営みが影響を受けることは過去の歴史からみても想像がつく。しかし、グローバルに「知」のツールが独占された体制は、ここ20年間くらい

に成立してきたものであり、電子化は集中管理が容易なシステムを作ることであり、そういった一元管理のしやすい時代に、「知」をいかにして平等に共有してゆけるかは、国の科学政策の上で非常に大きな課題と考えられる。

### 学術情報の寡占化

学術雑誌は、学問グループが同人誌を出すことによって発達してきたものである。お互いに論文を読み合って水準を向上させてゆく。この古典的な体制は、経済社会の発展を支える科学技術に多くの研究費が投下されて爆発的に論文数が増加し、同好会的なサークルが学会誌を維持してゆくことがむずかしくなると考えられる。そして、組織的な編集出版を行う大手商業出版社に出版が集中し、気が付けば、わずか数社の大手出版社が多くの学問分野の主要雑誌を出版するようになっていた。こうした寡占状態の上に、わずかここ数年で、コンピュータネットワークを利用した電子ジャーナルが主要な情報収集手段に変化した。そのため、いくつもの図書館や研究室の蔵書として保管され、相互利用サービスによって提供されてきた雑誌情報が、個人用コンピュータから誰もが引き出せる夢のような便宜が現実になった。その有り難さと引き換えに新たな問題点が生じてきたのが現在である。

紙媒体の雑誌の利用であれば、研究室で購入していた雑誌の値段が上昇した場合、その雑誌の購入を続ける負担と購入を停止して相互利用サービスを頼る不利益は、その研究室で容易に天秤にかけられる。この判断は雑誌価格上昇にブレーキとして働いてきたと考えられる。ところが電子ジャーナルになると、非常に魅力的な電子ジャーナルアクセスと面

倒な相互利用サービスの便宜の差が非常に大きいのかかわらず、購読停止判断が一研究室を超えて大学全体での出版社との値段交渉と密接に関係する。まして、出版社がその独占的体制を背景に全雑誌を大学内で自由に閲覧できる契約が有利なように価格システムを誘導すると、購読継続と停止の判断は大学にとって事実上不可能に等しくなる。電子集中的管理は、ボタンひとつで数百の雑誌をその大学のすべてのコンピュータからアクセスできないようにすることを保証する。出版社にとって可能なこの選択に対抗する手段を大学は持たないのである。出版社にとっては、数多くの顧客の気まぐれによる雑誌販売部数の変動リスクを回避し、非常に優位な立場で大学など少数の大きな顧客と値段交渉ができるシステムが完成したということができる。大学などの雑誌購入機関は、弱い立場に追い込まれていることを認識せざるを得ない。

現実には、大学担当者は懸命に値段交渉を行っており、出版社も国際的水準の「知」を護る自負を持っているので、平時には、落ち着くところの価格に落ち着くわけであるが、対抗手段がないことを前提にした交渉が苦しいことには間違いがないし、研究費が電子ジャーナル負担金で圧迫されることも確かである。また、それに加え、国際紛争等の非常時には「知」の確保そのものが厳しくなることが危惧される。そうした中で、電子社会の「知」を保護する制度の確立に向けた、国レベル、国際レベルにおける基本的な議論が迫られているといえよう。

(たに まこと)

<一冊の本シリーズ 2 >

## 思い出の本

京都大学図書館機構 副機構長, 経済学研究科 教授 森棟 公夫

「一冊の本」シリーズですが、私にはこの一冊という本がありません。また、大学院に入った後、特に留学後は研究上の本は緻密に読んでいますが、一般的な本は目を通す以上のことはしていません。本来は本好きで、今でも小説などの文章をじっと味わったりしていますが。

本好きなのは子供の頃からで、小学生の頃は図書室の本を手当たり次第に読んでいました。親に買ってもらった本は、話の内容を細かく憶えるまで何度も繰り返して読みました。テレビ時代が始まる前で、ラジオも夜は浪曲が鳴っていたくらいでしたから、本を読む以外にはすることもなかったのでしょう。当時読んだ本についての記憶は不正確で、買ってもらった本も度重なる引っ越しで何も残っておらず、詳細は少しも分かりません。子供用の文庫などに含まれているものも多いのですが、「揚子江の少年」という本、その後見かけません。中国の子供のかつたるい毎日の話でしたが、当時では未知の外国の話でもあり、興味を引かれて読み返しました。小学生以前に戻りますが、今の親たちが子供にする「読み聞かせ」でもありませんが、母が読んでくれた絵本を思い出します。母が子供の時の古い絵本で、傷んでいましたが立派なもので、美しい武者絵が描いてありました。牧場で楽しく暮らしている馬の親子がいましたが、母馬は戦争に出ていき、そのまま帰ってこないという話でした。牧場の背景にある岡の稜線を、騎馬の一群が駆けていく絵が私の記憶に残っています。この話は、最近も見かける「お馬の親子」で、

私にとって一番古い本です。

テレビが広まりかけたのが、1959年の皇太子と美智子さんのご成婚の頃で、私が中学生になったことでもあります。海外のニュースも多く入ってくるようになったように思えます。家に、「ロンドン・東京5万キロ」といった題名の本がありました。豊田自動車のクラウンで、ロンドンから東京への転勤、引っ越しをするというドキュメントでしたが、私には知らない国を国産の自動車で走り回ることが誠に夢のように思えたものです。ヨーロッパの人たちが、見慣れない車を見て集まってくるといったくだりもあったような気がします。まさか、日本が自動車大国になるなどとは想像できない頃でした。「コンチキ号漂流記」はチリからポリネシアへ筏で流れていくという学術的な冒険のドキュメントだとは思いますが、想像の範囲を超えた冒険だったため、心に残っています。高校の頃は、学校で薦められたジードとかドストエフスキーなどの他に、当時話題になった本だったので、「チボー一家の人々」を繰り返して読みました。小説としておもしろかっただけでなく、フランスの資産階級の生活とか、第一次世界大戦の時代の描写などにおおいに心を引かれました。

高校時代に読んだ小説以外の本のなかで、「モゴール族探検記」には強い印象を持ちました。この本も今は手元にないため詳細は分かりませんが、梅棹先生のグループが行った今で言うフィールド調査の記録だったので。 (ネットで調べたところ、岩波新書で再版されている。) 本を買ってきた父は、税金を使って

役に立たないことをしてという風な文句を言っていました。私には大学の先生はこんなおもしろいことをして暮らしているのかと思いました。大学の先生は、仕事の中で冒険をしているといった認識です。これは大きくて、両親に僕は将来大学の先生になって、こんな冒険をするんだ、と言いました。父が医者だったもので、医学部以外に進学する場合には理由が必要でしたから。父は、そうかと言っただけでした。後で聞いてみると、医者にならされて、一生文句を言っている医者の子を数多く知っていたから黙っていたそうです。しかし、私たちの時代では、どの学部に行けば、勉強の中で冒険ができるのかなどといった情報はよく分かりませんでした。

私はその後、「ケインズ」(伊東光晴、岩波新書)でケインズという経済学者の活躍や、今でいうマクロ理論の断片を知り、経済学が理論的な分析をすることを知りました。著者の伊東先生と後年親しくなるなどとは思っていませんでしたが。さらに、高校三年の夏に「経済学50年」(大内兵衛)を読んで、先生達の生活や、研究上のやりとりなどにあこがれを抱くようになりました。やはり大学の先生はおもしろい生活をしているという認識が高まり、専門は何でも良かったのですが、よくも分からずに経済学部を受験しました。経済学部に入って以来、研究分野は当初の予定とは大きくずれましたが、現在に至っています。

(もりむね きみお)

## 地球にやさしい戦車

京都大学人文科学研究所 助手 藤原 辰史

京都大学附属図書館の地下書庫に『戦車』という本が所蔵されている。古本市場では、3万円をくだらない貴重本だ。全602ページ+付録57ページ、高さは27cm、横幅は19cmとなかなか重厚な風貌である。奥付をみると、1942年6月21日、初版1000部発行、発行所は東京神田神保町の山海堂出版部とある。著者は猪間駿三<sup>いの ましゅんぞう</sup>という1902年生まれの陸軍少佐だ。

この本と出会ったのは、5年前、修士論文でナチスのポーランド侵攻について調べるために書庫に入ったときである。偶然見つけたこの本をパラパラめくると、第一次世界大戦から第二次世界大戦初期に至る世界各国の戦車の重量、最速スピード、定員、発動機、武装、搭載可能弾数などが詳細に記されてあった(ただし防諜のため日本の戦車についてはほとん

ど触れられていない)。ロールス・ロイス、ルノー、プジョー、フィアット、フォード、ダイムラー、クルップ等どこかで聞いたような会社が戦車メーカーとして名を連ねる。しかし、こうしたデータは、いまでは軍事マニア向けの本やインターネットに書かれてあるから、それほど真新しいものでもない。ましてや、最先端の戦車を開発する企業の研究者にとっては無用の長物でしかないだろう。

正直に告白すれば、当時のわたしにとっても『戦車』は役に立たなかった。ナチスに関して貴重な情報を提供してくれるわけでもない。論文として役立つ箇所はほとんどなく、次の日には附属図書館のカウンターに返却した、と記憶している。

ところが、昨年末、バックナンバーセンターの桂キャンパス移転について調べようと思

って附属図書館の地下をぶらぶら歩いていたとき、偶然わたしはこの本と再会した。修士論文執筆時の思い出に耽りながら、著者の「自序」、「第一章 近代戦車の現れる迄」と「第二章 戦車の構造」のあたりを漫然とめくっていると、俄然面白くなって座り込んでしまった。しかし、さすがにお尻が冷たくなってきたので（地下書庫にはもっと多くの机・椅子そしてコピー機を設置してほしい）、貸し出して、家に帰って読むことにした。読み終わった後、自分の態度を反省せざるをえなかった。当時のわたしは、「論文の役に立つか立たないか」という二分法でしか資料を選別していなかったのである。

著者の猪間は、歴史家ではない。自分を「技術者」と規定する戦車の技師である。実際、彼は、陸軍技術本部に所属していた34歳の頃、「チ二車」という試作車の設計をしている。「チ二車」は大阪砲兵工廠で制作された中戦車だが、別の技師が競作し三菱重工で作成された「チ八車」が「九七式中戦車」として公式に採用され、結局実戦に投じられることはなかった幻の戦車である。とはいえ、日本の戦車技術の一端を担っていた人物であることに変わりはない。その技術者が描く戦車の歴史叙述にわたしはひきこまれた。わずか25ページのなかに、紀元前3500年から現在に至るまでの戦車史がとてもユーモラスな文体で綴られているからだ。

まず、「自序」で突然戦車への愛が吐露される。「著者は兎に角戦車が可愛い」。兵器を「カワイイ」と表現する感性に、いきなり驚かされる。つづいて、戦車の源泉についての記述も独特だ。「最も古い原始的な戦車は鎧・兜である」。だが、この「生きた戦車」には重大な欠点があるという。それは、スピードの欠如と人間の疲労だ。そこで馬と車を利用することになったというわけだ。

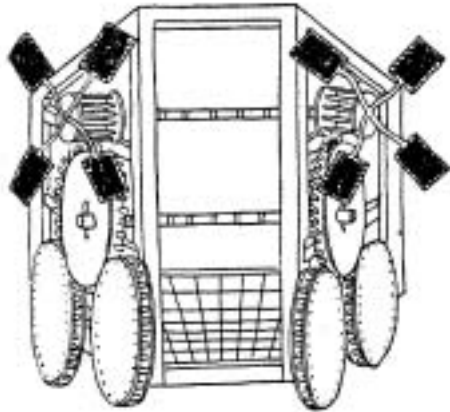
さらに、猪間は戦車に関する図版・文献コ

レクションをつぎつぎに提示する。「紀元前3500年代の古代バビロニアの印璽」、「古代バビロニアのラガッシュに起つたウル・ニナ王朝の第三世のエアンナトゥムの戦勝記念碑裏面」（紀元前2000年頃）、「アッシュール・バーン・アプリ三世の獅子狩りの図」（紀元前7世紀頃？）、「志那山東省武梁祠彫刻」（紀元150世紀頃）、「旧約聖書に出てくる「鉄の戦車」。ほかにインドやエジプト、ギリシャ、ローマ、アンコール・ワットの遺跡の壁、日本では『南総里見八犬伝』からの2ページにわたる引用もあり、まさに戦車史大全である。これらは、動物に車をつけて、車を走らせる類のもので、内燃機関を利用する近代戦車と区別するために、猪間は「チャリオット Chariot」という語を用いている。

チャリオットといえば、1482年にレオナルド・ダ・ヴィンチが友人に宛てた手紙を引用することも忘れない。「私は目下丈夫な被覆されたチャリオットを作りつつある。それがその鉄砲を発射して前進するに当つては、如何なる優勢な敵といへども必ず敗北する、そしてこの車の後について歩兵が何等の抵抗を受けることなく安全に前進する事が出来る」。猪間は、これを「驚くべき文章」だと褒めちぎっている。その理由は、戦車の使用法について、歩兵と組み合わせないと戦車の威力が出ない、という第一次世界大戦後によく確立したセオリーをすでに論じているからだそう。

しかし、実のところわたしが最も驚嘆したのは、ダ・ヴィンチの手紙ではなく、その手紙の10年前に描かれたらしい「装甲風力自動車」という図だ（図参照）。これについて、猪間は、技術者の視点からつぎのように解説する。「Valturioと云ふ人の考案である。装甲自動車どころではない、自動車の元祖と云つてもよからうが、何ともはや愉快千万な車で、車の大きさにくらべて風車が小さすぎるのだとか、伝導方式の幼稚さだとか操向装置が見当らな

いことだとかはまだ好いとしても、この車が敵陣の中で阿修羅の如く暴れまはつて居るまつ最中に風がバツたり止んだらと思ふと全く吹き出さざるを得ない。」



装甲風力自動車（1472年）

こんな呑気な戦車は、現代では反戦の象徴にさえなるだろう。いや、いまなら、まさに「地球にやさしい戦車」だといってもてはやされるかもしれない。猪間の文章とともにいろいろな想像をかき立てる図である。

このあと、1916年9月15日のソンムの会戦でわたしたちが通常イメージする「戦車」が登場する過程を丹念に叙述しているのだが、それについてはここでは省く。それにしても、日中戦争が硬直状態に陥っていた時代に書いたというこの本から、15世紀のイタリアで装甲風力自動車なるものが考案されていたことを教わるとは意外であった。というのは、わたしのイメージでは、戦争中の兵器製造者とはひたすら無駄を廃し、安いコストで強力な兵器を作ることに全力を注いでいるのであって、まさか、ダ・ヴィンチの考案した戦車に驚嘆し、古代バビロニアの王様が乗った戦車に思いを馳せ、風車をクルクル回しながら進む自走式戦車の欠陥について考えているとは、想像すらできなかったからである。

猪間はずぎのようにさえ言う。「今日飛行機と戦車があらゆる兵器の内が一番花形となつ

て居るのはそれが新しい兵器だからだけでは無い。そのどちらもが人類発生以来の夢を実現したからなのである。」この役立たずの風力戦車は、猪間にとっては人類の夢を実現する史的展開のなかのひとつのステップなのだ。

この猪間を、人殺しの道具の設計者として倫理主義的に断罪することはたやすい。だが、主観的には人類を背負っているこの技術者が現代社会に投げかける問いは、とても重いとわたしは思う。なぜなら、「軍事技術」とは人類にとって身近であり「文化」であると猪間は信じているからだ。たとえば、未来の戦車についてづぎのように述べている。「心理的兵器と言へば、数年前著者が或る車を設計したとき、正面を怪獣の顔になぞらへたらと思つたが、笑つて誰も相手にして呉れないで止めたことがある。〔……〕今にきつと、お獅子の面を近代化したやうな形相をした戦車が『噛むぞおーツ』と吼え乍ら陣内に踊り込んで来るやうな時が来るであろう。幸か不幸かこんな人間味のある戦車はいままで開発されなかったが、猪間にとって戦車とは第一に心理的兵器であることに注目すべきだろう。戦車とは、人間の感情や感覚、文化と溶けあつた兵器なのである。

兵器の歴史学的研究はもっぱら専門の研究者と軍事マニアのなかでなされており、そのほかの人々はあまり興味を持たない。イラク戦争で米英軍の戦車が発射した無数の劣化ウラン弾とそれに汚染された戦車の残骸が現地の兵士や住民にもたらした被爆の状況を、世界最初の被爆国の住人があまり知らないのも、こうした知（とりわけ歴史の知）が軽視されていることと無関係ではない。それは、この国で兵器研究が半ばタブー視されてきたことばかりでなく、たとえばかつて『戦車』を15円で購入した京都大学で、いままでの歴史学者と工学者が、15円分の戦車の共同研究さえ怠ってきたことにも原因がある。そもそも『戦

車』のような「工学」に分類される本は、科学史の研究者をのぞいて、「理工系」からは時代遅れとして「文系」からは専門外として見過ごされる傾向にある。しかし、こうした古い理工系の本もまた、現代社会の科学技術を考えるための一級資料なのである。

来年度、原則として理工系部局由来のバックナンバーセンターの雑誌が桂キャンパスに移転される予定である。それによって、「理系」と「文系」の本が混淆する空間が京都大学から少なくなることは間違いない。つまり、わたしにとって『戦車』がそうであったように専門外の面白い史料と偶然出会えるような空間、「装甲風力自動車」のような珍物と遭遇する空間が少なくなるのだ。これは、総合大学として危機的だとさえ思う。現代社会はむしろ、サイバースペースでは成立困難なこうした知的空間を、桂にせよ、宇治にせよ、吉田にせよ、分離ではなく敢えて創造していくような図書館を必要としているからだ。

以下は後日談。戦後、猪間駿三はプラント輸出の専門家となり、ビクターオート、日本製鋼所、神戸製鋼所、日本硝子、千代田化工建設で働き、日本の高度経済成長期の海外進出の一翼を担うことになる。経済学部の図書室には『プラント輸出の実務 ある技術者の体験』(1970)という彼の著作があるが、そこで猪間は「日本人には人種差別の観念がない」からその国民性を海外進出の武器にすべきだと主張している(著書に『戦車』を記すことも忘れない)。この「懲りていなさ加減」が、彼を技術者として生きさせただけでなく、現代日本を「プロジェクトX」的「科学技術創造立国」へと向かわせようとしている。「可愛い」と思うほど戦車に魅せられたこの技術者を批判する道は、解剖するほど人間に魅せられたあの芸術家の作品を批評するのと同じほど果てしなく、また険しい。しかし、それは、カビ臭い理工系の図書にもっとたくさんの愛を注ぐことから始めるしかない。

(ふじはら たつし)

## バックナンバーセンター(Back Number Center;BNC)の移設計画

バックナンバーセンター(以下「BNC」という)は、附属図書館・本館(以下「本館」という)地下2階の北側書庫内に設置された国内外の雑誌のバックナンバーから構成されています。

BNCは、昭和58(1983)年に本館が新築されたのを機会に、学内の図書館・室の狭隘化を解消し、資料とスペースの効率的な利用を実現する一助として昭和60(1985)年1月に設置されました。普段は利用度が低いなどの理由から、手元の図書館・室になくとも、本館に収蔵して利用できればよい雑誌を18の部局図書館・室が選択し、本館に移管しスタートしました。このため、該当雑誌の刊行時期は、少なくとも30年以上以前に遡ります。なお集中した際に

重複資料は1組に整理され、集密書架に収められています。

その後、昭和63(1988)年度に4部局から追加搬入があり、合計すると19部局からの9,859タイトル、148,608冊になっています。(以下これを「BNC1」とします)これ以降は、収納スペースの関係から、大規模な追加搬入は見送ってきましたので、部局からのBNC1への増加はありません。

一方、本館が購入等で所蔵している雑誌のバックナンバーは、書庫内の別の場所に排架され泣き別れ状態にあり利用上不便でした。これを解決して利用上の便宜を向上させるため重複整理を行ってBNCに統合しました。これは、



5,697 タイトルです(以下これを「BNC2」とします)。これらはBNC1 と一括されBNCの名称の元に提供されてきました。この統合の結果、新しい雑誌も相当数がBNCに混排されるようになっていきます。

現在OPACで検索しますと、所蔵先がBNC表示となっているタイトル数は、和雑誌9,680タイトル、洋雑誌5,912タイトル、合計15,592タイトルになっています。

### BNCのタイトル数

BNC1	BNC2	合計
9,895	5,697	15,592

(データ等は、2005.12.6.現在)

BNC開設後20年を経て、新たな収納スペースの確保が必要となってきており、概算要求も含めて、確保方策に取り組んできました。このような状況の中で、(桂)図書館棟の建設が寄付により実現されることとなり、(第2回)桂図書館建設WG(平成17(2005)年8月)において、桂図書館基本計画として自動化書庫を設置し、BNCのうち自然科学系雑誌を移設することが決定されました。

この決定を受けて、図書館協議会幹事会で検討した結果、「BNC移設に関する部局の意向調査」「BNC利用実態調査」を元に、移設対象の雑誌を決定していくことになりました。

「部局の意向調査」は10月、「利用実態調査」は11月に実施し、その結果や様々な意見を踏まえて、(第3回)図書館協議会(開催:12月15日)において、以下の内容が了承されました。

移設する資料の対象範囲

対象: 理系部局から移管された雑誌バックナンバー

対象外

- (1) 移管元が文系部局の雑誌バックナンバー
- (2) 理系部局から移管された雑誌バックナンバーのうち、対象外にする申し出が

あり、図書館協議会での最終審議の結果、対象外とする雑誌バックナンバー

- (3) 雑誌以外の資料(例:年鑑、調査報告、年次報告等雑誌以外の逐次刊行物)

(桂)図書館棟で予定している移設資料の利用方式

直接的利用

出納方式による閲覧・複写

デリバリー

e-DDS(オンライン・デリバリー)、複写物のデリバリー

\*経費が許す限り、柔軟な対応を考慮する。

\*現物のデリバリーは、学内デリバリーシステムにおいて考慮する。

長期大量利用

利用度によって、附属図書館・本館に戻す措置を考慮する。

その後、役員懇談会の決定により、(桂)図書館棟の自動化書庫が建屋建設時とは別調達設備となったため、移設も当初予定より遅れる見通しとなりました。

移設雑誌の決定までに、時間的な余裕もでき、期限を3月31日に延長して、上記の(2)に関し、対象外希望雑誌の申し出の受け付けを終了したところです。

BNCの一部はすでに、京セラ文庫「英国議会資料」恒温恒湿室として転用されていますが、移転後の空スペースの再利用、再配置も併せて計画を行う予定です。

これらの情報は、ホームページ上

<http://www3.kulib.kyoto-u.ac.jp/>

[BNC/framebnc.html](http://www3.kulib.kyoto-u.ac.jp/BNC/framebnc.html)

でもご覧いただけます。

# 生命医科学情報基地としての京都大学医学図書館

## 京都大学 医学研究科閲覧掛

「電子ジャーナルにアクセスできません。」「明日までに論文が必要です。」「インパクトファクターが高い の雑誌を購入してください。」これらは、京都大学医学図書館（以下、医学図書館）に寄せられる問合せや要望を代表しています。

医学図書館は、電子ジャーナル等の電子媒体によって、先進的で国際的な最新情報を求める利用者が多い図書館です。医師や看護師等の国家試験のための学習環境の整備にも努め、PBL（問題解決型学習）を進める医学教育も支援しています。

### 1. 医学図書館の位置付け

医学図書館は、1965年、医学部構内に分散配置されていた各教室の雑誌・図書を集中化する目的で建設されました。

現在は、医学研究科および附属病院とその関連部局（医学部保健学科、再生医科学研究所、ウイルス研究所、放射性同位元素総合センター、放射線生物研究センター）から選出された委員から成る医学図書館運営委員会により運営されています。医・薬・保健学分野の情報拠点として、最新の知識の習得や創造を目指す学内外の研究者、医療従事者、学生を中心とする多くの利用者のニーズにこたえるべく、電子情報を含む文献資料の整備、複写サービス、情報リテラシーの向上などに積極的に取り組んでいます。

### 2. 資料・情報の特徴

#### 1) 紙媒体

蔵書数は約19万冊、うち、図書と製本雑誌の比率はおよそ3対7です。生命に携わる分野であり、常に最新情報を必要とすることから雑誌に比重を置いてきた歴史が伺えます。日本には稀なピュフ

ォンの「Histoire naturelle, generale et particuliere」（1785-91）等、医学図書館が所蔵する貴重資料は京都大学電子図書館で閲覧できます。



医学図書館のWebサイト  
(<http://www.lib.med.kyoto-u.ac.jp/>)

#### 2) 電子媒体（データベース・電子ジャーナル・電子ブック）

医学系のデータベース、電子ジャーナルおよび電子ブック（Ebooks）の一部は全学共通経費のほか、医学図書館の独自予算で購入し全学にも提供しています（表1）。電子ジャーナルを研究室で利用するだけでなく、自宅や出張先で利用できる

表1 医学・医療系の主要データベース

データベース名	特徴
医中誌Web	国内の医・歯・薬学等の定期刊行物から採択した文献データベース。収録1983年～。
Medline( @Ovid版、Silver Platter版)	生物・医学系文献データベース。収録1966年～。
Cochrane Library	EBM( evidence-based medicine:科学的根拠に基づく医療 )のためのデータベース。Cochrane Libraryは年4回更新。
EBM Reviews	
AgeLine	老人問題、心理学等、老年学に関する文献データベース。
A MED: Allied and Complementary Medicine	代替・補完医療に関する文献データベース。
CINAHL	看護学関連の文献データベース。
SPORTDiscus	スポーツ医学関連の文献データベース。
UpToDate	診断・治療・予防に関する臨床支援ツール。年3回更新。
Integrity	医薬品開発の関連情報、実験データを網羅的に収録。収録1968年～。[附属病院を除く医学部内のみ]

注)京都大学内LANに接続された端末で利用できるデータベース参照  
(<http://www.lib.med.kyoto-u.ac.jp/databases.html>)

リモートアクセスの需要が他部局より非常に多いのも医学系の特徴です。冊子体より約2ヶ月早く読める電子ジャーナルは、学内提供約9,500タイトル中、約1,700タイトルが医学系で、最新の研究や緊急を要する手術等の医療に不可欠です。

### 3. 医学図書館の主な利用者サービス・活動

#### 1) 医学医療情報の提供と利用促進

医学図書館のホームページを情報基地として、データベース、電子ジャーナル等を活用するためのQ & A等様々な情報を提供しています。図書・雑誌の遡及入力を積極的に推進したことにより、京都大学蔵書検索(OPAC)で検索できる資料は、平成17年度末で医学図書館所蔵資料の85%程度(研究室分を除く)になる予定です。平成17年10月の自動貸出機の導入により、プライバシーの保護や利用促進も図っています。

#### 2) 文献複写物の提供

学内で入手できない文献は、他大学や海外(British Library, National Library of Medicine)等、どこからでも入手して提供しています。早く入手したいという利用者の要望にも迅速に対応しています。

#### 3) 情報リテラシー教育支援

購入した情報資源を学習・研究に効果的に活用していただくための講習会や授業を積極的に企画・実施しています(表2)。

#### 4) 他大学との連携協力

京都大学医学図書館(保健学科図書室を含む)は、京都府立医科大学附属図書館と相互協力に関する協定を締結しました(平成16年8月1日施行)。入館・閲覧・貸出等についての利用者サービスを相互に行っています。所蔵する情報資源の有効利用及び利用者の学習・教育・研究に資することを目的にしています。

他大学等からの文献複写の受付件数(NACSIS-ILL)は、全国10位前後です。調査研究を行っている全国の方々へ、各図書館を通じて文献を提供しています。

#### 5) 地域・社会貢献

入館者の6%(平成16年度4,100人)が学外者です。京都府医師会等の地域の専門的な医学医療関係者から、他大学他機関の学生、患者さん等の一般利用者まで幅広く支援しています。

表2 医学図書館が実施する情報リテラシー教育支援

平成17年度	講習会・授業等の内容
3-4月	図書館の利用について(医員・研修医オリエンテーション)
4月	OPACの使い方講習会
4-5月	授業「社会健康医学基礎スキル(文献検索評価法)」 (社会健康医学系専攻専門職学位課程、選択科目)
5月	授業「医科学研究」(医科学専攻修士課程1回生、必修科目)
6月	オンラインジャーナルの使い方講習会
6月	SciFinder Scholar講習会
7月	UpToDate講習会
10月	授業「D医療情報学」(医学部医学科3回生、必修科目)
10月	Scopus講習会
11月	PubMed講習会
12月	Web of Science & Derwent Innovations Index講習会
1月	効果的な文献検索結果の活用-EndNoteの利用-講習会
随時受付	オンデマンド講習会

#### 4. 医学図書館の課題と展望

施設の老朽化への対応と施設整備：築40年の医学図書館は、老朽化が著しいため、防水・耐震性等の改善を行うとともに、新しい時代感覚とニーズに対応した学習環境を整える必要があります。

医学図書館運営費の確保：電子ジャーナル等の資料費増大に伴う、研究室負担額の上昇への打開措置、購入希望を取り入れた経費負担方法等の検討を要します。

情報リテラシー教育の推進：授業や講習会等を通じて、情報を活用し問題解決能力を高めるための情報リテラシー教育支援を一層積極的に推進します。

企業や病院で実施されるようになったPDCA(Plan 計画-Do 実行-Check 評価-Action 検討改善)サイクル等により、業務の合理化、コスト削減を図りながら、図書館の質とサービスの向上をめざし、利用者の期待と信頼に応え続けるように努めていきたいと考えています。

## 平成17年度京都大学図書館機構公開事業開催報告

メインテーマ:「京都大学の学術情報基盤の未来を考える」

期間:11月15日(火)~12月18日(日)

### 企画展示会

11月15日(火)~12月18日(日)

展示会テーマ:知識を運ぶメディア

-京都大学の学術情報散見-

会場1:百周年時計台記念館展示室

会場2:附属図書館3階展示室

入館者数 5,007名

### 記念講演会

11月16日(水) 13:00~15:30

講演:

「大学における学術情報の歴史と未来」

土屋 俊(千葉大学附属図書館長)

「京都大学の情報環境のこれから」

松山隆司(情報環境機構長)

「京都大学図書館機構について」

大西有三(図書館機構長)

参加者:105名(ネット視聴者25名)

### キャンパス討論会:吉田地区

11月16日(水) 16:00~18:10

「人文・社会科学系、工学系の学術情報の今後は巡って」

司会:森棟公夫(図書館副機構長)(経済)

パネリスト:堀和生教授(経済)「経済学分野の

学術情報の現状」、森澤眞輔協議員(工学)

「工学系学術情報の今後は巡って」、田中克己

教授(情報)「大学における基盤の学術情報

資源整備とは」、水野直樹協議員(人文研)

「人文科学系の学術情報-その特色」

参加者:68名(ネット視聴者13名)

トピック:BNC(バックナンバーセンター雑誌)の

重要性。東アジアの電子ジャーナル導入。

### キャンパス討論会:北部地区

12月5日(月) 15:30~18:10

「自然科学系の学術情報の今後は巡って」

会場:理学部6号館402教室

基調報告・司会:大西有三(図書館機構長)「京

都大学図書館機構について」

パネリスト:谷誠教授(農)「森林利用と環境保

全の両立を図る立場から学術情報の持続的  
利用を考える」、高橋陽一郎教授(数研)「数  
学文献を巡る最近の動向」、永井裕子(日本  
動物学会事務局長・NII/SPARC推進室員)「過  
たず、惑わされず!!オープンアクセス」

三木律子(エルゼビア・ジャパン代表取締役)「学  
術情報環境の現状と将来-商業出版社の場  
合-」

参加者:73名(ネット視聴者8名)

トピック:電子ジャーナルに関する現場研究室の経  
費負担増大感。機関リポジトリ、オープンアクセス。

### キャンパス討論会:南部地区

12月15日(木) 16:00~18:30

「バイオメディカル・サイエンスにおける電子ジャー  
ナルの利用実態と今後の展望」

会場:芝蘭会館2階山内ホール

司会:野田亮協議員(医学研究科教授)

パネリスト:武藤誠教授(医)「オンライン出版の発  
展と問題点(著者・編集者・読者の立場から)」、

金子周司教授(薬)「教育現場における電子

ジャーナル利用の現状と展望(学生・大学院生

教育の立場から)」、松岡雅雄教授(ウイルス研)

「研究現場における電子ジャーナル利用の現状

と展望(研究者の立場から)」、Natasha

Robshaw(BioMedCentral)ビデオ出演、松

下茂(サンメディア)「BioMedCentralの設立

理念とOpenAccess電子ジャーナルの動向:

BMCとOpenAccess誌の日本における状況、

宮入暢子(トムソン)「OpenAccess誌のインパ

クト・ファクター」

参加者:65名(ネット視聴者5名)

トピック:学術情報基盤を堅固にするための大学  
のネゴシエーターの必要性。医学・生物系の電子  
ジャーナルの利用実態(著编者、研究現場、教育  
現場)。

### 3地区の討論会への合計参加者数

311名(ネット視聴者51名を含む)

## 教員著作寄贈図書一覧

(平成17年9月～平成18年3月)

所属等	寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
名誉教授	川上 貢	禅院の建築 新訂	中央公論美術出版	2005
名誉教授	佐々木 克	明治維新期の政治文化	思文閣出版	2005
名誉教授	梅棹 忠夫	京都の精神	角川書店	2004
名誉教授	梅棹 忠夫	梅棹忠夫の京都案内	角川書店	2005
名誉教授	佐藤 康彦	世外半日	春浩会	2006
名誉教授	祖田 修	Philosophy of agricultural science : a Japanese perspective	Trans Pacific Press	2006
名誉教授	祖田 修	農林水産業の技術者倫理	農山漁村文化協会	2006
名誉教授	瀬尾 芙巳子	詩集 風の舞	新風舎	2006
教育学研究科	川崎 良孝	デジタル情報資源の検索	京都大学図書館情報学研究会	2005
経済学研究科	大西 広	全球化到军事帝国主义	吉林文史出版社	2005
経済学研究科	文 世一	交通混雑の理論と政策	東洋経済新報社	2005
理学研究科	小山 勝二	見えないもので宇宙を観る	京都大学学術出版会	2006
工学研究科	森澤 眞輔	生活水資源の循環技術	コロナ社	2005
工学研究科	竹脇 出	Dynamic Structural Design	WIT Press	2000
人間・環境学研究科	河崎 靖	ゲルマン語学への招待	現代書館	2006
エネルギー科学研究科	坂 志朗	バイオディーゼルのすべて	アイピーシー	2006
地球環境学堂	柏 久	環境形成と農業	昭和堂	2005
人文科学研究科	安岡 孝一	文字符号の歴史	共立出版	2006
霊長類研究所	松沢 哲郎	アイとアユム チンパンジーの子 育てと母子関係	講談社	2005

この一覧は寄贈者著作のみの掲載となっております。上記以外にも多くの図書を附属図書館や部局図書室にいただきました。今後とも蔵書充実のためご寄贈いただきたくよろしくお願いたします。

### お詫び

前号(Vol.42, No.1)の「教員著作寄贈図書一覧」の**大西広先生**の身分を誤って名誉教授と記載しました。正しくは**経済学研究科**です。お詫びして訂正いたします。

## 附属図書館利用統計 (平成16年度)

### 入館利用状況

#### 1. 年間入館者総数

778,419人

内訳

学内	入館機	763,440
	マニュアル*	4,455
学外	閲覧**	9,745
	見学	779(人)

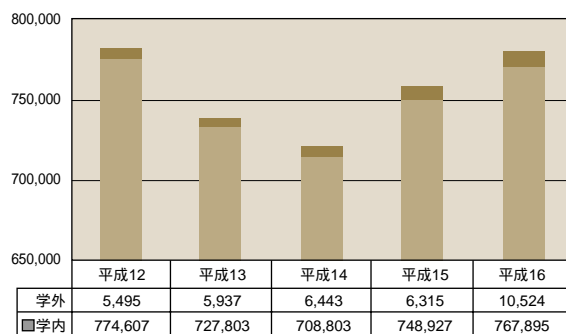
\* マニュアル：忘れたり、紛失等による利用証不携帯の入館者  
\*\* 閲覧：学外者の特別閲覧願手続きによる入館者

入館機による入館者 763,440人について

開館日	1日当たり	2,455
平日	1日当たり	3,041
土・日曜日	1日当たり	746
1日の最多入館者数*		6,639(人)

\*平成16年7月20日

#### 2. 入館者総数5年間推移



### 資料利用状況

#### 1. 普通図書貸出利用状況

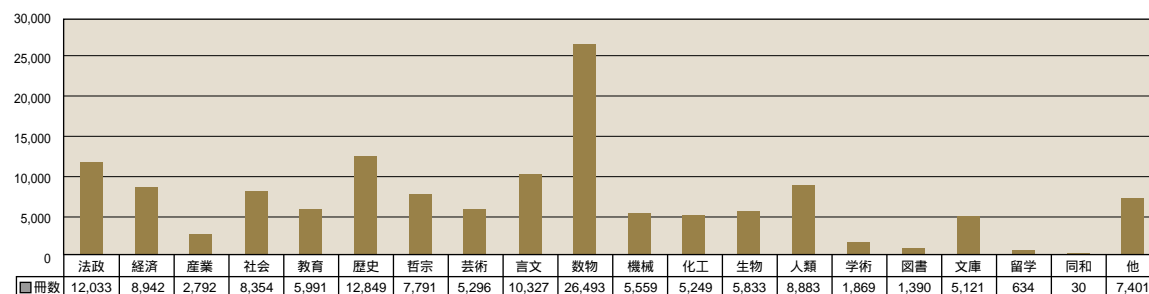
年間利用冊数 147,036冊

年間利用人数 78,264人

#### 2. 学内者への貸出

	平成16年度	平成15年度
年間貸出冊数	142,842冊	140,444冊
年間貸出人数	76,974人	74,485人
1日平均貸出冊数	459冊	461冊
1人当たり貸出冊数	1.8冊	1.9冊
年間貸出冊数最高日	12月24日(1,244冊)	1月14日(1,215冊)

#### 3. 分類別貸出状況



### 利用対象者数

#### 1. 登録者総数

35,823人 (平成17年5月1日現在)

内訳

教員	4,408人
院生	9,828人
学生	13,461人
職員	3,181人
その他	4,945人

教員には非常勤講師、共同研究者等を含む。  
院生には大学院聴講生、研修員等を含む。  
学生には学部聴講生等を含む。  
職員には非常勤職員を含む。  
その他には卒業生その他を含む。

#### 2. 利用証発行枚数(平成16年度)

2,116枚

内訳

新規交付	2,044枚
再交付	72枚

(うち放送大学生は496枚)  
(再交付とは、紛失・有効期限切れ・転部・改姓等をいう)

#### 3. 貴重書利用状況

貴重書(特殊文庫)閲覧上位リスト

1	富士川文庫	490冊
2	菊亭文庫	142冊
3	和貴重書	72冊
4	河合文庫	61冊
5	平松文庫	56冊

## 参考業務

### 文献調査 < 国内 >

#### 1. 受付件数

		平成16年度(件)	平成15年度(件)
内容	所蔵調査	5,505	5,856
	事項調査	895	381
	その他	3,949	4,050
	合計	10,349	10,287
形式	FAX(文書を含む)	1,575	2,096
	電話	3,814	3,927
	カウンター	4,960	4,264
	合計	10,349	10,287

#### 2. 依頼件数

		平成16年度(件)	平成15年度(件)
内容	所蔵調査	139	174
	事項調査	59	23
	合計	198	197
形式	FAX(文書を含む)	198	197

#### 3. 受付・依頼件数合計における学内者・学外者別利用件数

学内者	5,781
学外者	4,766
合計	10,547(件)

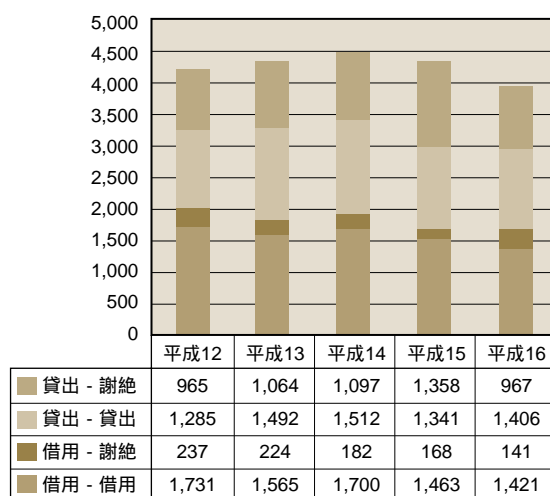
## 相互利用

#### 1. 他大学図書館訪問利用

	平成16年度(件)	平成15年度(件)
発行件数	960	867
受付件数		

#### 2. 現物貸借

##### 現物貸借5年間推移



#### 4. FAX・文書による受付・依頼の機関別件数

機関名	受付件数(件)	依頼件数(件)
学内	26	52
国立大学	245	80
公立大学	91	3
私立大学	1,016	42
国立共同利用機関	9	3
公共図書館等	31	3
非営利団体	25	13
一般企業	9	0
個人	120	0
国立国会図書館	3	2
合計	1,575	198

### < 国外 >

#### 受付件数

平成16年度	平成15年度
15件	8件

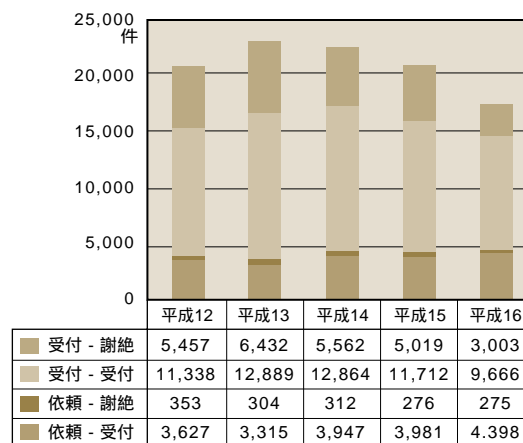
#### 3. 文献複写

	平成16年度(件)	平成15年度(件)
依頼	5,778	5,447
受付	14,774	19,145
合計	20,552	24,592

#### 内訳

	国外	国内	学内	合計
依頼	318	4,673	787	5,778
受付	53	12,669	2,052	14,774
合計	371	17,342	2,839	20,552

##### 文献複写(国内)5年間推移



## 図書館の動き

平成17年		( ~12月18日 )	
8月25日	電子図書館国際会議 ( 於:名古屋大学 ) ( ~26日 )		・展示会( 於:百周年時計台記念館、附属図書館 ) ( ~12月18日 )
9月 9日	第1回講演会 ( 著作権法・個人情報保護法と図書館 )		・京都大学図書館機構発足記念講演会 ( 11月16日 )
15日	京都大学図書館協議会( 平成17年度第2回 )		・キャンパス討論会 吉田地区( 11月16日 )
29日	平成17年度国立七大学図書館協議会 ( 於:京都大学 )		北部地区( 12月5日 ) 南部地区( 12月15日 )
29日	平成17年度国立七大学図書館長会議 ( 於:京都大学 )	15日	3rd Fundamentals Seminar( 目録基礎研修 )
29日	平成17年度国立七大学図書館事務部課長会議 ( 於:京都大学 )	16日	国立大学図書館協会西地区シンポジウム ( ~17日、於:岡山大学 )
10月 4日	近畿イニシア運営委員会( 第2回 )	24日	図書系連絡会議
6日	留学生対象図書館オリエンテーション	12月8日	平成17年度大学図書館近畿イニシアティブ初任 者研修( ~9日、於:関西学院大学 )
7日	図書系連絡会議	15日	京都大学図書館協議会( 平成17年度第3回 )
11日	平成17年度大学図書館職員講習会 ( ~14日、於:京都大学 )	16日	4th Fundamentals Seminar( レファレンス基礎 )
27日	国立大学図書館協会理事会 ( 平成17年度第3回 於:北海道大学 )	22日	図書系連絡会議
11月 2日	第59回国公立大学図書館協力委員会 ( 於:東京大学 )	平成18年	
2日	平成17年度国会図書館と大学図書館長との懇 談会( 於:国立国会図書館 )	1月16日	第1回学術情報リポジトリ検討委員会
2日	図書系連絡会議	22日	図書系連絡会議
15日	京都大学図書館機構公開事業	2月14日	5th Fundamentals Seminar( 目録基礎研修2 )
		15日	京都大学図書館協議会( 平成17年度第4回 )
		23日	図書系連絡会議
		3月16日	図書系連絡会議
		30日	第2回学術情報リポジトリ検討委員会

## 目次

電子ジャーナルの現状と安定利用のために .....	1
電子ジャーナル整備の経過 契約のしくみと経費負担 .....	3
今後の電子ジャーナル .....	9
雑誌電子化時代における情報確保と価格交渉 .....	10
思い出の本 .....	12
地球にやさしい戦車 .....	13
バックナンバーセンター( Back Number Center ; BNC )の移設計画 .....	16
生命医科学情報基地としての京都大学医学図書館 .....	18
平成17年度京都大学図書館機構公開事業開催報告 .....	20
教員著作寄贈図書一覧 .....	21
附属図書館利用統計(平成16年度) .....	22
図書館の動き .....	24

### 編集後記

今や電子ジャーナルは学問・研究の世界を席卷しています。京都大学でも冊子体雑誌とのせめぎあいであろう対処してよいのか混迷の中にあります。今回の電子ジャーナル特集で京都大学での電子ジャーナル購読の実態を明らかにし、今後の方向を示唆する手助けができれば幸いです。( e )